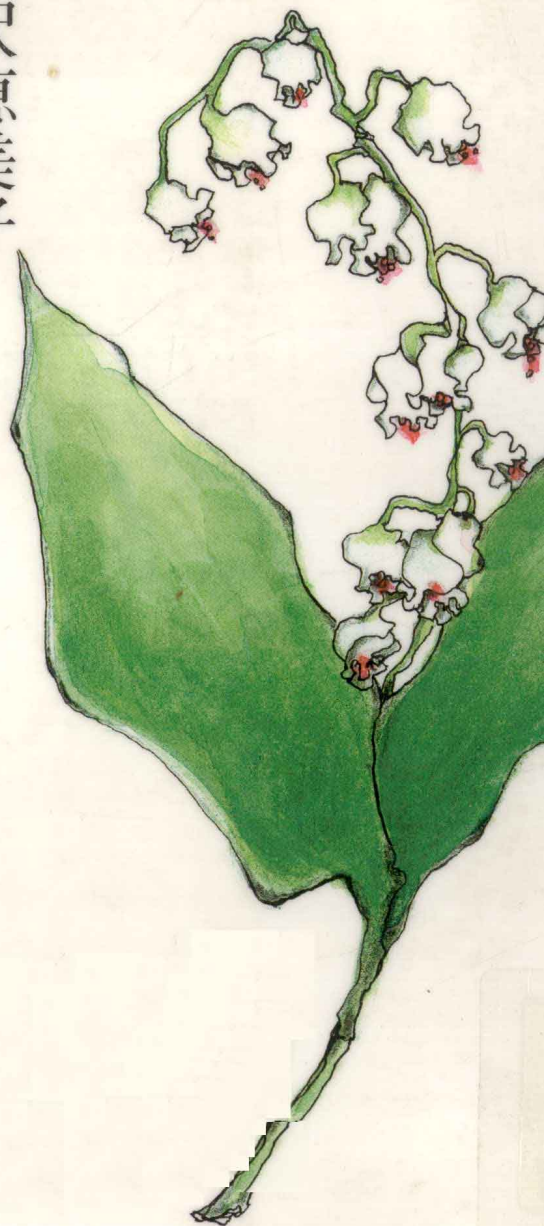


金沢恵美子

一本の電話から

人生そして
出逢い



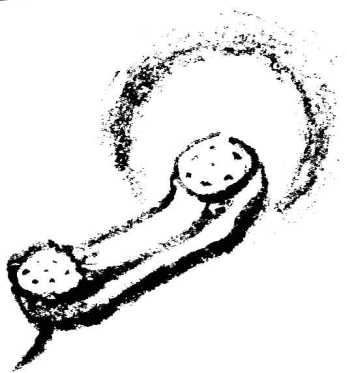


一本

江苏工业学院图书馆
电话
书章

から

人生そして出逢い



金沢 恵美子

一本の電話から

人生そして出逢い

発行日 平成九年十二月十五日 ©

著者 金沢恵美子

〒710 岡山県吉備郡真備町岡田二二二―三

TEL 〇八六六―九八―〇〇五九

発行者 福山 琢磨

発行所 (株)新風書房

〒543 大阪市天王寺区東高津町五―一七

TEL 〇六―七六八―四六〇〇

FAX 〇六―七六八―四三五四

印刷所 (株)新聞印刷出版事業部

道



もくじ

表紙デザイン・イラスト 上地麻紀

第一章 夢と希望

はじめに	2
かけこみ入院	4
重い貧血からガン宣告	6
与えられた運命	8
輸血の尊さ、大切さ、重さ	10
すばらしきナースとの出逢い	12
咳と寝息（いびき）で大迷惑かけた私	16

四人部屋から個室へ	19
夢と希望です	21
看護学生、二人との出逢い	24
予告なしに広島からO型夫婦がやってきた	28
心のおちこみを救ってくださったナース	32
逆転満塁ホームラン、手術前後の思いやり	34
手術前日なのに	38
一九九七年、六月十七日	43
奇跡	50
ナースの私服姿と退院直前の旅	53
アイバンクの登録を望んで	56
ユーモアとアダ名と親切	59
院内友達との交流	62
私を知る人達の大声援	68
よくそここまで、主人、子供の思いやり	73

待望の退院		77
-------	-------	----

第二章 人生そして出逢い

長い間の夢だった一冊の本の出版		82
迷子になった往復はがきから		82
小学校、複式学級二十四の瞳		88
中学時代、テニスで明け暮れた三年間と友		91
進路の悩み、両親とのかっとう		96
胃腸科でのナースとの出逢い		99
結婚、初めてのプレゼント		104
子供の成長とご近所の温かさ		107
笑顔が素敵で、知的な彼女		112

第三章 心にともしびを

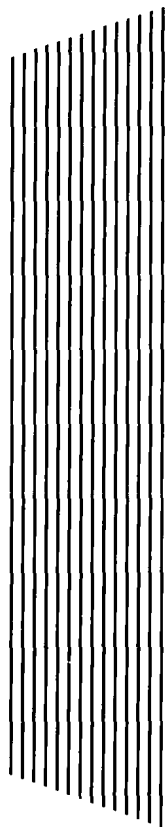
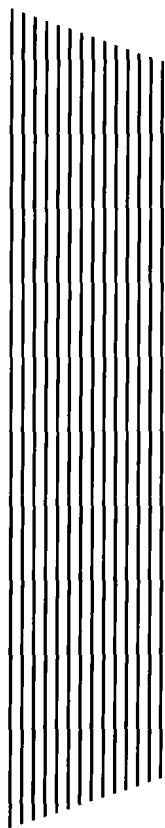
心にともしびを		118
---------	-------	-----

金沢さんへ
.....

お母さんへ
.....

お礼にかえて
.....

第一章 夢と希望



はじめに

「リーン」

「もしもし金沢です」

「〇〇医院ですが、御主人に来てもらってください」

前日、近くの内科医で初診を受け、血液検査の結果は次週火々水曜日頃にと、いわれて帰っていたのに。

まさに、この電話。一本の電話から、私の人生が急転回することになる。

この随想のタイトルを『一本の電話から』と決めたのは、今回の病院での多くの方との出逢い、そして後述するが、「迷子になった往復ハガキから」の項での彼女との出逢いも一本の電話がきっかけだったからである。

会って言葉を交わすというのではなく、互いに持つ受話器からの声のみで、さまざまに人生をかえられる。そう思った時、この『一本の電話から』という言葉に何か妙にひかれた。

一九九七年三月二十九日以降の自分の姿は、全く予想できず、家族にも大きな心配をか

けた。皆さんに助けられ、神から頂いた人生とも思う。自分ひとりの命ではないということも痛切に感じた。第二の人生の始まりを思った。過去をふりかえりつつ、今を大切に生きていこうと思う。

私の好きな花はすずらん。花言葉は、「幸せになろうよ」だそうだ。そのすずらんの花言葉にも通じるが、心から「今、幸せです」といえるような人生を送れたらと願う。多くの人との出逢いがあり、人生の谷間からの脱出も経験させていただいた。これもまた一本の電話からである。

今回の入院生活はいろいろな意味で、これからの人生を考えなおす機会となった。人は困った時にこそ真価が問われると、言います。

「もう一度、ふんばってみよう」

こう心の変化が起きた時、それまで沈んでいた何かが嘘のように軽くなった。多くのすばらしい人達との出逢いによって、私なりの新たな日々が送れるのでは、という希望に変わった。私の良き運命にかかわってくださった皆様に感謝したい。

『夢と希望です』という主治医の先生からいただいた言葉を心の糧に笑顔で送れる今日の幸せをかみしめながら、日々を歩んでいきたい。

かけこみ入院

一九九七年三月二十九日。近くの医院の看護婦さんから、電話をいただいた。

「御主人様に来てもらって下さい」

前日、初診を受けてのこの電話。結果がよろうはずはない。主人は会社に出ていたため、しばらく考えて、ひとりでタクシーで行った。

想像以上の悪い結果で、救急車をお呼びしようともいわれた。が、お世話になりたい病院があるのでお断りして、タクシーで行くことを希望した。

先生は会社へ電話して主人とも話して下さった。私も少し話せたが、ここまで下さる先生。

「月曜日僕が連れて行きます」との言葉もあったらしいが、急がれた。先生の紹介状、診断書、検査結果、手紙等、短い時間に用意してくださり、医院のお勧めですぐ近所の看護婦さんが、御一緒に下さるという。

ご迷惑をおかけするからと断ったが、大丈夫。土曜日の午後はオフだからと、再三いつてくださった。

やさしい親切なお言葉に甘えることにした。車で一緒に家に帰り、病院のカード、そして健康保険証、他少々を手にも再び車へ。

十一時半には近くの医院へいたのに、午後一時には中央病院四階七号室へ。直立していた。いやフラッシュとかも知れない。その間、一緒にくださった看護婦さんの動きは、見事だったと思う。右も左もわからない私を親切にサポートしてくださった。今、思う。もし近所の看護婦さんが一緒になかったらと。精神的にも不安で、心配でオロオロしていたかもしれないが、彼女のすばやい機転とハートで病室までたどりつかせていただいた。土曜日の午後というのに受け入れてくださった病院には感謝している。

まさに、とびこみ入院であった。

救急車の患者でもなかったのに、受け入れていただいたことをありがたく思った。

遅い昼食を一緒にくださり、いろいろ話した。励ましもあった。治療していただいて早くよくなってほしいと……。とてもありがたい言葉であった。

あつという間の出来事に尽きる。自分がそれほど悪いとは……。

軽く考えすぎていた。

更年期の症状ぐらいに思っ、自宅にて対応していた。いつかよくなるだろうと。しか

し、しんどくなって近くの医院へ。増血剤ぐらいくださるだろうな、が私のひとり診断だった。

食事して、医院の看護婦さんから、病院の看護婦さんへと私をバトン。お世話になることになった。

午後一時、部屋に入ってよろしくお願いしますと挨拶してからの一日であった。その日は、夜十時半まで、ゆっくりと三本の点滴が続けられた。最初の日、お逢いしたナースはどうしても、思い出せない。それは親切に迎えてくださったと思うのだが、申し訳なく思う。やっぱり動揺していたのだろうか。主人も来てくれ、少しでも不安をとりのぞこうという配慮が嬉しかった。

これからどのくらいの入院生活やらと思うと、ここまで来たら、全快までお世話になると決心した。良くしていただいて帰ろうと。あっという間の入院劇。これも人生かな。家にてゴロンタの生活ともお別れ出来たら幸いと思った。とにかく全快を祈った。

重い貧血からガン宣告

手術後

近くの医院から病院へバトンされた私は、それほど貧血の数値が悪いとは予測できず、

短い期間で退院できるぐらいに、軽く考えていた。それまでは、更年期だからくらいに。貧血が度をこすと、大変なことになること等想像していなかった。

これは大変！、と思ったのは、先生から、輸血の話が出た時。

そして入院一週間後、主治医からの、主人同席の上でのガン宣告。先生は、自然な口調で、私がガンの初期であることを、告げた。今、手術すれば完治するであろうと、おっしゃった。全く予期せぬ病名であった。が、私はなぜか聞く耳をもてたと思う。主人の姿、その時見る余裕はなかったが、きつと、びっくりしたにちがいない。二人共、無言で部屋に帰ったと思うが、今となって、あの時、宣告されて本当に良かったと思う。

医学の進歩で、ガンⅡ死、ではないし、これから続く治療を思う時、私は伝えてくださった先生に感謝した。

宣告された日の夜、エレベーターの前で、主人から、何も気にせず、頑張るようにとの優しい言葉。私は何を伝えたか覚えていないが、看護婦をしている姉に伝えてほしい。電話してほしいと、伝言したと記憶している。なぜかこれだけ。私以上に主人の気持ちを思うと心配になった。これから私達にどんなことが待ちうけているのだろう。

私達夫婦は、主治医他全スタッフを信頼し、すべておまかせしようと誓った。これは暗

黙のうちに伝わり、幾度も、主人、私に、治療方針、予定を細かく、正確に知らせてくださった。ありがたく思った。信頼しきって、これからの道のりを歩もう。ベストを尽くしてくださっている先生方に、忠実でありたいも思った。全快へと希望をつなぎ、今日を生きることにした。

先生は、患者さんが元氣になられて笑顔で帰られることが、何より一番の喜び。楽しみであることも伝えてくださった。「きっと元氣になって帰れます」力強く、そしてやさしく言ってくださった。

ガンを宣告して、治療に入ってくださった先生。私にとって良かった。死の恐怖よりもなぜか全快して帰れる、と、信じた。

与えられた運命

難病である両眼色素網膜変性症の患者でもある私に、又ひとつ重い病氣が加わった。なぜ、私ばかりに……？と思っていた時、付き添いの看護に来ていた姉（現役看護婦）に、「恵美子だから耐えられると思って、神様が与えてくださったのよ」

姉からの何気ないことは。私はその言葉に反応した。そうか、神様は私のその力を期待

されているのかも知れないと、思えてきた。今更、神様でもあるまいが、人は弱いもので、困った時の神頼みとなる。

私も時々手をあわせるが、心のどこかで何かに頼りたいと思っていたのか、姉のその言葉でなぜか私も、明るく生きていけるのでは？と、答えらしきものがみえてきた。

本当にありがたい言葉でもあった。心のどこかで迷っていたことも事実。でも何かのきっかけで前進できるかも。弱い心の持ち主である私は、またどこかで、迷いこむかも知れないが、これまでとはちがう少し元気な姿になれるかも知れない。心許せる友にも、こうした悩みは話していなかったが、これからは話を聞いていただくことも出来るような気がする。

眼のときにはひとりで、閉じこもり、といっても家の中でゴロンタしていて、脱出するまでに相当な時間がかかり、周囲に心配もかけた。今度こそ！（あってはならないが）何かあったら、本心を話して意見を聞こう。与えられた運命、そう思うことによって、私の人生はきつと、変わっていく。沢山の人達の力によって今あることは、決して忘れない。命は誰にも平等にひとつ。その命とのかかわり方は、私に与えられた運命として、これから新たな気持ちで、日々を送ってみたい。